

音楽鑑賞による意識変化の調査

— 保育者を目指すピアノ学習者を対象に —

Research of the change in awareness by an appreciation of music

— For learner of Piano aim for nursery teacher —

次世代教育学部こども発達学科

大山宮和瑚

OHYAMA, Miwako

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

要旨：保育者養成課程において、邦人作曲家達の創作した童謡は重要なレパートリーであるものの、彼らの残した日本歌曲に触れる機会は殆ど無い。そこで、保育者を目指すピアノ学習者を対象に、童謡と、その世界観に高い親密性を持つ日本歌曲を組み合わせたプログラムによる音楽鑑賞会を実施し、音楽学習意欲や表現力への影響を調査した。調査結果には、特に奏者の表情変化に注目した回答が多く、表現の重要性に対する再認識に繋がったと思われる。

キーワード：音楽教育、保育者養成、音楽鑑賞、童謡、日本歌曲

I. はじめに

幼稚園教諭、保育士養成課程において、ピアノ演奏やピアノ弾き歌いなどの音楽学習は必要不可欠である。しかしながら、保育者を志して初めて、ピアノを学習し始めるケースは大変に多い。実際、こども発達学科の入学時ピアノ初学者は、平成29年度入学者が54.1%、平成30年度入学者が50%と、全体の約半数を占めている。そこで昨年度より、こども発達学科では特に器楽演習Ⅰ・Ⅱでの指導方法をマンツーマン型からグループレッスン型へと大幅に変更、同時にピアノ初学者でも無理なく学習を進められる教材開発を行った。この教材は「保育士養成のためのピアノ弾き歌い教材開発－わかりやすい！学びやすい！コードでかantan！保育のうた－」として編集印刷をし、今年度より器楽演習Ⅰ・Ⅱの使用教科書に定めている。

ここには、器楽演習Ⅰ・Ⅱともに、弾き歌い課題は各20曲ずつが収録されている。これら課題曲は、世代を問わず歌い継がれる楽曲、季節やイベントに関する楽曲などを織り交ぜて選出した。中でも、とりわけ山田耕筰、團伊玖磨、中田喜直をはじめとする邦人作曲家たちが創作したこどものためのうた（以下、童謡）は、保育者を目指す者にとって重要なレパートリーで

あり、当然ながら、本教科書にも代表曲が数曲収録されている。彼らは抒情溢れる日本語をテキストとした大変多くの歌曲作品（以下、日本歌曲）を生み出し、日本に西洋音楽が普及する過程において一大ジャンルを確立したことで知られているが、保育者養成課程において、その事実に触れられる機会は殆ど無い。

このように、彼らの作品は、クラシック音楽－とりわけ声楽と保育の両分野においてそれぞれ大変重要視されているにもかかわらず、相互に取り上げられる機会は極端に少ない。これは、日本歌曲は「大人が歌うために書かれた声楽作品」、童謡は「こどもが歌うために書かれた声楽作品」と暗に位置付けられているためと考えられる。また、ピアノ初学者が過半数を占める中では、演奏技術指導に終始してしまい、取り上げる機会が持てないのも、その原因であろう。

しかしながら、《芥子粒夫人》（山田耕筰作曲/北原白秋作詞）《こどものための8つの歌》（中田喜直作曲/中井昌子他作詞）などに代表されるように、日本歌曲の金字塔とされる作品の中には、強いメルヘン性を帯びたもの、こどもに歌って聴かせることを想定して書かれたテキストを持ち、その世界観が表出したものが少なくない。保育者を目指す者にとって、これら日本歌曲作品が内包される抒情性や母性、或いはメル

ヘン性に何らかの形で触れる機会を得ることは、豊かな表現力と童謡作品への理解をも育むものと筆者は考える。

そこで今回、保育者を目指す学生の豊かな抒情性や表現力を育むとともに、音楽学習の意欲向上を図ることを目的とし、童謡と日本歌曲を同時にプログラムに盛り込んだ声楽リサイタルを企画実践した。

Ⅱ. 実施方法

実施日：2018年11月12日（月）18：45～19：30

実施場所：環太平洋大学第1キャンパス フィロソフィア ロビー

対象者：環太平洋大学次世代教育学部こども発達学科学生、教員

配布物：演奏会プログラム、歌詞カード、アンケート

本公演はプロの声楽家によるハーフリサイタル形式で実施し、終演後に来場学生を対象としたアンケート調査を行った。招聘声楽家には、日本歌曲の演奏に特に定評のある梅村憲子氏（福井大学教育学部准教授・声楽家）をお招きした。また、演奏曲目については、器楽Ⅰ・Ⅱの使用教科書に収録されている團伊玖磨、

中田喜直、山田耕筈の童謡と日本歌曲の中からそれぞれ数曲を選び、構成した。演奏会プログラムには、3人の作曲家についての簡単な紹介をプログラムノートとして記載した。図1、2の通りである。



写真1、2 会場の様子

Program

團伊玖磨

ぞうさん（詩：まど・みちお）

おつかいありさん（詩：関根榮一）

《6つのこどものうた》より「さより」（詩：北原白秋）

中田喜直

めだかの学校（詩：茶木滋）

かわいいかくれんぼ（詩：サトウハチロー）

《6つのこどものうた》より「たあんき ぼーんき」（詩：山村暮鳥）

《6つのこどものうた》より「風のこども」（詩：竹久夢二）

山田耕筈

ベチカ（詩：北原白秋）

芥子粒夫人（詩：北原白秋）

團伊玖磨（1924-2001）

戦後の日本のクラシック音楽界を牽引した作曲家の一人で、エッセイストとしてもよく知られています。東京音楽学校（現在の東京藝術大学）作曲科で学びましたが、同時に学外で山田耕筈の下でも作曲の勉強をしました。ラジオ体操第2や映画音楽など、放送音楽のジャンルでも沢山の作品を残した作曲家ですので、どこかで知らないうちに耳にしたことがあるはずです。團の作品の中で、とりわけ「夕鶴」は日本のオペラの金字塔と言えるでしょう。民謡「鶴の恩返し」を題材にした木下順二の戯曲を台本とし、今なお国内外で繰り返し上演され、根強い人気を誇っています。

中田喜直（1923-2000）

「歌曲と言えば中田喜直」と言ってもよいほど沢山の歌曲作品を書いた作曲家で、その数は3000曲にのぼると言われています。「夏の思い出」「ちいさい秋みつけた」「雪のふる街を」…中田の作品を歌ったことがない人は、きっといないでしょう。東京音楽学校ピアノ科を卒業しましたが、手が小さいことからジャズピアニストになる夢を諦め、作曲家として活動し始めました。「いぬのおまわりさん」の作曲者である大中恩らと1955年に「ろばの会」を結成。以来、沢山の童謡のレコードや楽譜を出版し、現在まで歌い継がれています。

山田耕筈（1886-1965）

東京音楽学校声楽科を卒業後、ベルリン王立芸術アカデミーで作曲を学びました。鈴木三重吉の「赤い鳥」運動に参加し、詩人・北原白秋とのコンビで数々の童謡を生み出しました。いずれも、日本語の美しさが際立った名曲揃いです。山田は、日本で初めてオーケストラを立ち上げ、指揮者としても西洋音楽の普及に全力を注いだことで知られています。現在の日本のクラシック音楽は、山田耕筈無くしては、これほどまでに発展しなかったかもしれません。

（大山 富和樹）

図1 プログラム内面

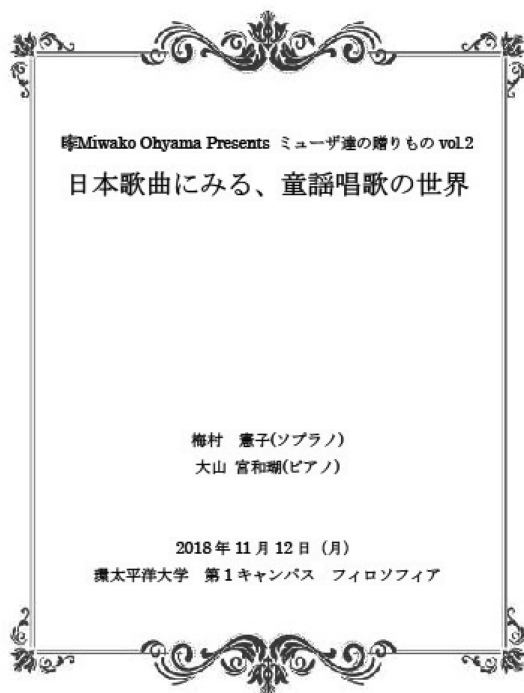


図2 プログラム表面

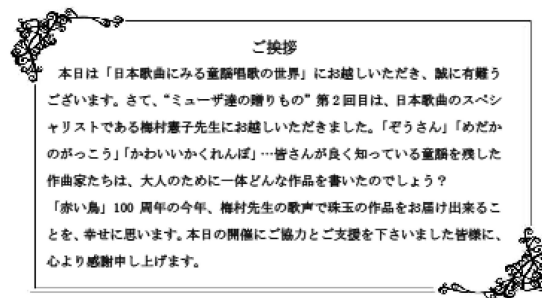
Ⅲ. アンケート結果からみる実施の効果

来場者45名のうち有効回答学生数は36名。ほぼ全員が器楽演習Ⅰ～Ⅳ、若しくは器楽対策講座の受講者である。学校での音楽鑑賞会を除き、なんらかの形でクラシック音楽の演奏会に参加経験のある学生は55%であった。演奏曲目中、「良かった」と回答のあった曲は、次のとおりである。

表1 プログラム中、良かった曲

ぞうさん	27.7%
おつかいありさん※	47.2%
さより	19.4%
めだかのがっこう※	63.8%
かわいいかくれんぼ	33.3%
たあんき ぽーんき	27.7%
風のこども	52.7%
ペチカ	33.3%
芥子粒夫人	72.2%

(複数回答可, ※は使用教科書収録曲)



梅村 憲子 (ソプラノ)

東京藝術大学卒業。ロータリー財団奨学生としてドイツ国立シュトゥットガルト音楽大学大学院へ留学。ドイツリートをコンサート・リヒターに、発声指導をブルース・アーベルとフースラーの直弟子であるテオ・リンデンバウムに学ぶ。大学在学中は東京藝術大学バッハカンタータアンサンブルに所属し、カンタータをはじめとするバッハの合唱曲を小林道夫に学ぶ。在学中、ドイツリートによるソロコンサート、ソリストとして合唱団との共演など、多数の演奏会に出演。帰国後は松陰室内合唱団(現バッハ・コレギウム・ジャパン)に所属し、鈴木雅明の下、バロック及びそれ以前の合唱曲の研究を続ける。《ザンドリヨン》(マスネ作曲)の妖精の女王、《魔笛》(モーツァルト作曲)の夜の女王をはじめとするコロラトゥーラソプラノとして活躍するほか、《夕霧》(團伊玖磨作曲)の出演は7回を数える。また、バロック唱法によるビオロド楽器とのアンサンブルから現代音楽に至るまでの幅広いレパートリーを持ち、東京、神戸、大津、横浜で意欲的なプログラムによるリサイタルを開催すると同時に、合唱曲、宗教曲のソリストとしても多くのステージを踏んでいる。日本歌曲にも造詣が深く、『日本歌曲第1集・黎明期の歌曲/山田耕作歌曲(1)』(PWC-5049, 5050)はレコード盤所収において「たおやかで女性らしい音の通った演奏」と評された。合唱指導にも積極的に取り組み、神戸では3つの合唱団を指導、分かりやすく具体的な発声指導、合唱指導にはファンが多い。近年では映像や自動演奏ロボットとの共演、朗読、これらのコンサートプロデュースなども盛んに行っている。神戸松蔭女子学院大学非常勤講師、東北文化学園大学特任教授を経て、現在環太平洋大学教育学部准教授、関西二期会、日本発声学会関西支部、日本音楽表現学会、国際コダーイ協会各会員。

大山 官和瑚 (ピアノ)

愛知県立芸術大学を経て同大学院修了。第4回三善晃ピアノコンクール金賞。第42回なにわ藝術祭(新進演奏家競演会)新人賞、大阪府知事賞、大阪市長賞、大阪府紙賞の各賞を受賞。Uwe Konischko(元ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団首席トランペット奏者)、Thomas Hooten(ロサンゼルス・フィルハーモニック首席トランペット奏者)、Joseph Alessi(ニューヨーク・フィルハーモニック首席トロンボーン奏者)、Ian Bousfield(元ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団首席トロンボーン奏者)等、国内外の著名演奏家のリサイタル伴奏者を務めている。倉田佳代子、山田富士子、藤田孝、橋本悦子、堀江聡、渡邊純二、牧野敏の各氏に師事。環太平洋大学特任講師。

童謡の中では、使用教科書に収録され、すでに授業内で学習済みの曲に回答が集中した印象である。また、メインの演奏曲である《芥子粒夫人》や「風のこども」も高い数値を獲得しており、本格的な日本歌曲も一定の支持を得られたことが分かる。

演奏会後の感想に関する回答からは、弾き歌い実技に対する確かな意欲の高まりをみることができる。授業内で与えられた課題を越えての積極性、童謡への深い理解という点では今一步の工夫が必要であるが、少なくとも、生演奏による音楽鑑賞で、音楽学習意欲は確実に向上したと考えることができるだろう。

表2 演奏会後の感想(複数回答可)

もっとピアノが上手になりたい	77.7%
もっと大きな声で歌えるようにしたい	83.3%
教科書に載っていない曲も知りたい	33.3%
上手になるよう一生懸命練習したい	72.2%
今習っている曲も芸術の一部であると理解できた	47.2%
聴く前と変わらない	13.0%

自由記述欄では、歌う時の顔の表情や強弱など、「表現することの大切さ」に言及した回答がとりわけ多くみられた。これらは授業での指導項目の一つとし

て重要視しているポイントであるが、その大切さを学生達自身が改めて再認識したという点で、本公演は有効であったと考えられる。自由記述欄の代表的な回答を、次に示しておく。

- ・表情や強弱があるだけで、その歌の絵（情景）が見えてきた。
- ・表情がついていることで、歌詞がよく頭に入った。
- ・歌声だけでなく表情でも表現をしていて、凄いと思った。楽しそうに演奏しているのを見ると気持ちが良い。
- ・表情がとても良く、目や眉がしっかり上がっていた。強弱もしっかりとついていた。
- ・自分たちが普段練習している曲とは思えないぐらい、全く違って聞こえた。歌詞にあわせて表情も変化していた。
- ・歌詞によって歌い方を変化させていて、言葉も聞き取りやすかった。
- ・童謡には短い歌の中にストーリーが詰まっていると気づき、とても楽しかった。
- ・保育者として子ども達を教育していく中で、音楽はとても大切だと改めて感じた。
- ・このような機会をもっと増やしてほしい。

クラシック音楽の音楽鑑賞に関する意識変化に対する設問では、次のような回答結果を得られた。自由記述欄にも次回開催を望む声が多く、幾分能動的な結果ではあるものの、CDなどでは得ることのできない、生演奏ならではのクラシック音楽鑑賞の醍醐味を伝えることができたと考えられる。

表3 今後もクラシック音楽の生演奏を聴いてみたいと思うか

積極的に聴きに行きたい	22.2%
機会があればホールなどで聴いてみたい	50.0%
学校で開催するなら聴いてみたい	25.0%
CD等でなら聴いてみたい	0.0%
聴こうとは思わない	2.8%

IV. まとめ

アンケート結果からは、当初のねらいである「保育者を目指す学生の豊かな抒情性や表現力の育成」に、一定の効果があったと考えられる。中でも、奏者の表

情の豊かさに注目した学生が予想以上に多かったことは、特筆すべき点であろう。とりわけピアノの苦手な学生は、読譜や演奏だけに集中してしまい、その都度指摘をしても表情作りにまで意識を向けられない傾向にある。楽器から離れ、一聴衆として奏者に注目することで、表情やダイナミクスなどの「音楽表現の豊かさ」を客観的に認識し、その重要性を再確認することができたといえる。さらに、「音楽学習意欲の向上」にも一定の効果があったと考えられる。この好影響の恒常性については継続した調査が必要であり、今後の研究課題としたい。

本公演は、クラシック音楽を聴く習慣の無い学生達が対象ではあったが、聴く事に集中しながら、奏者の様々な表情や仕草にまで目を向けていたようである。終演後の梅村氏に謝意を伝え、談笑している様子は、企画者として大変嬉しい光景であった。普段学習している童謡だけではなく日本歌曲の中でも演奏難易度の高い曲目に支持が集まったことも併せ、今後、学生を対象とした構内演奏会の開催意義に充分なりうるであろう。

参考文献

金田一春彦『童謡・唱歌の世界』，講談社学術文庫，2015年
 中田喜直・小林純一編『現代こどものうた名曲全集』，音楽之友社，192-194頁，1969年
 服部公一『童謡はどこに消えた 子どもたちの音楽手帖』，平凡社新書，2015年
 山住正己『子どものうたを語る－唱歌と童謡－』，岩波新書，1994年
 横田憲一郎『教科書から消えた唱歌・童謡』，扶桑社文庫，2004年
 与田準一編『日本童謡集』，岩波文庫，1957年